

「歴史の偽造には騙されない」

明治150年

キャンペーンを斬る!

作家・半藤一利氏に聞く

「薩長史観」の呪縛から逃れ 「敗者」の側から歴史を見よ

「明治維新」とは、疑問や批判の余地がない歴史の必然だったのか。長年、日本人がそのように思わされてきたのは、権謀術数と暴力で権力を奪った薩長をはじめとする倒幕勢力が天皇の権威を利用し、勝者としての自分たちの行動を正当化したためだ。安倍晋三首相の「明治150年」賛美とは、こうした勝ち組の論理である。「薩長史観」の産物なのだ。しかし明治国家は、薩長の権力者が国民を支配するために天皇を限りなく神格化した末に、最後はファシズムと軍事的破局に行き着いた事実を忘れてはならない。

政府主催の10月23日の「明治150年記念式典」は、盛り上がり

欠きました。50年前の「明治100年記念式典」は盛大でしたが、当時「薩長史観」という用語がありませんでした。そこが50年前と比較して、「明治」という時代への見方が変化した遠因となっているのは間違ありません。この用語を初めて使ったのは、半藤さんですね。

自分で言うのも何ですが、私が新潮社から2008年に出版した『幕末史』という本で、初めて「薩長史観」という用語が登場したと思います。

「薩長史観」とは徳川幕府を倒し、明治新政府を作った薩長が、自分たちの行動を正当化するための言い分ということでしょうが、そもそもなぜこれに疑問を持たれたのです

か。

私は東京生まれですが、父親は新潟県長岡市の田舎出身。長岡藩は戊辰戦争で負け、「賊軍」とされました。中学生の頃、毎年夏休みに父親の郷里に行きましたが、祖父や祖母が盛んに言う。「日本は明治維新で素晴らしい近代国家を作ったように言われているが、薩長が勝手に暴力革命を起こし、わが長岡藩を7万4000石から2万4000石にして5万石かつさら

ったんだよ。あれは泥棒国家なんだ」と。学校の授業とだいぶ違う歴史だから、子どものころからずうつと頭にあつたのです。

権力を握った「小者」二人

—— 反対に、立派な志士が何人も出てきて旧態依然の愚かな徳川幕府を倒し、新しい立派な近代国家を作った、という言葉は「勝者の論理」が「薩長史観」ですね。

そうですね。薩長が自分たちの暴力革命を正当化するために作り上げた、物語だと思えます。その物語が、いつの間にか「正史」になりました。しかし、「明治維新」という用語が登場したのは、大久保利通が1878年（明治11年）に暗殺され、伊藤博文と山縣有朋という二人の「小者」が実権を握っ

た1880年（明治13年）か1881年（明治14年）のころになってからです。当時までは「御一新」とか「御瓦解」とか呼ばれていた。大村益次郎や木戸孝允、西郷隆盛といった薩長の功労者たちも次々と亡くなり、生き残った「小者」が浮上したため、改めて自分たちの権力の正当性を強調する必要があつたのでしょう。だから薩長が謀略とクーデターで暴力革命を起こし、権力を占有したのを「明治維新」という名で美化する。「薩長史観」が生み出されたと思えます。明治になってから吉田松陰が異様に持ち上げられたのも、「松下村塾の門下生」ということでこの二人が箔を付けたかったからではないでしょうか。実際は、どこまで松陰の教えを受けていたか不明



伊藤博文。(提供/共同)

薩長の権力者が手を染めた「天皇神格化」

▶ 一世一元と祝祭日の創作

中国から輸入した元号は、日本では長らく災難事等を理由に天皇の存命中にしばしば改元された。だが1868年に慶応から明治に改元された際、天皇が在位中は改元しない「一世一元」となり、1889年(明治22年)の旧皇室典範で規定された。これは国民の時間を天皇個人の生存時間と結びつけ、権威を神格化するためだった。また明治政府は、江戸期までの民衆の伝統的な祝祭日を廃止。1873年(明治6年)の太政官布告等により、主に皇室祭祀がある日を「祝祭日」として創作し、意図的に民衆と天皇とを結びつけた。たとえば紀元節(2月11日=「建国記念の日」)、春季皇霊祭(3月21日=「春分の日」)、神嘗祭(9月17日、後に10月17日)、秋季皇霊祭(9月23日=「秋分の日」)、新嘗祭(11月23日=「勤労感謝の日」)が挙げられる。

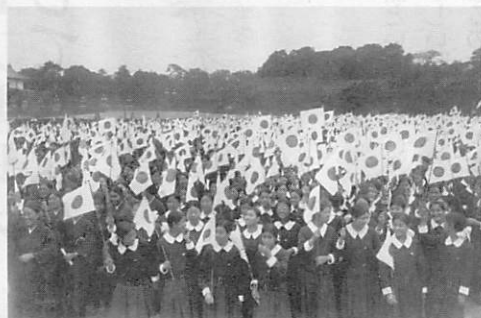
▶ 靖国神社の建立

それまで長州藩で行なっていた「招魂祭」を東京で行なうため、長州の大村益次郎が1869年(明治2年)、東京の九段に「東京招魂社」を建立。1872年(明治5年)に陸軍省・海軍省の管轄となり、1879年(明治12年)に靖国神社と改称した。薩長を始めとする権力者は、戦死者を敵味方の別なく祀ってきた日本の神道の長い「伝統」を破り、天皇側(官軍)とされた戦死者だけを「神」として祀り、旧幕府軍等「賊軍」とされた戦死者は一切排除された。以後、靖国神社と各地に建立された護国神社は、「天皇のために戦死する」ことを美化・至上価値とし、戦死者を「英霊」として国民に崇めさせ、侵略戦争に欠くことができない宗教施設として機能した。

▶ 教育勅語と国民教育の制度化

総理大臣の山縣有朋は1890年(明治23年)、当時勢いを増していた自由民権運動に対抗し、明治天皇に教育勅語を「下賜」させた。それは、天皇の祖先である「皇祖皇宗」が日本を作ったという皇国史観と、「重大事態があれば天皇のために命を投げ出せ」と命じる皇民化思想から成り、1880年代から制度化され始めた小学校で子どもたちがたたき込まれた「教育原理」となった。後に校門の近くに天皇・皇后の写真と教育勅語が「安置」された「奉安殿」が作られ、子どもたちは登下校時に礼をするよう強制され、祝祭日には校長が読む教育勅語を腰45度の状態で聞かされたのみならず、一字一句暗記させられた。祝祭日制度とリンクした天皇制教育の、最大の手段と言える。

(作成/編集部)



明治国家は、「天皇制教育」という恐ろしい爪痕を歴史に残した。1930年10月30日に、皇居前広場で開催された「教育勅語発布40年式典」に参加する女生徒たち。(提供/共同)

のようですが。——一方で、戊辰戦争で敗れた会津藩は薩長によって「賊軍」とされ、藩ごとつぶされたのですが、福島県の会津若松市は「戊辰戦争150年」と呼んでいるそうです。

私のところに取材に来た、福島県の地方紙の記者も言っていました。が、とてもではないが、政府のように「明治150年」を祝う気にはなれないからでしょう。私が『幕末史』を書くかと思った最大の理由だったので、なぜ戊辰戦争や会津攻めをやらなければならなかったのでしょうか。それは、



山縣有朋。(提供/共同)

戊辰戦争は必要だった

やる必要のない戦争でした。

——当然視するのは、まさに一方の側からの「史観」ですね。

そもそも、慶応元年(1865年)の段階で国論が統一したので

す。それまで頑迷な外国人嫌いだっただ孝明天皇は、1864年の「攘夷戦争」(元治元年)で長州が外国軍にあっけなく敗れてから開国して西洋文明を受け入れ、国力をつけてから攘夷をするという「尊王開国」路線に転じます。これは幕府の方針と一致し、アヘン戦争の危機感からも公武合体で幕藩体制を崩し、統一国家を作ろうとした。ところが、岩倉具視や三条実美といったクセ者の公家と組んで薩長は「尊王倒幕」路線に立ち、あくまで幕府を乗っ取るうとします。そのために1866年

(慶応2年)に孝明天皇が死去した後、薩摩が江戸放火という謀略で幕府を挑発して1868年に鳥羽伏見の戦い(慶応4年)を引き起こし、「討幕の密勅」や「錦の御旗」をでっち上げて幕府軍を破ります。十五代将軍の徳川慶喜は水戸藩出身で水戸学の影響から尊王意識が強く、天皇に反抗する気はありませんでした。したがって、順の意を表明して江戸城を無血開城しました。そのため、本来ならもう戦争をする必要は何もないはずでした。

——薩長も、「尊王開国」でしたし。

私に言わせれば、薩長が完全に自分たちの権力を固めるため、やらなくてもいい戊辰戦争を仕掛けたのです。そのために会津や長岡を始め多くの死傷者が出て、近代国家を作る時間が遅れてしまいました。ただ、例の「小者」二人が権力を握るまでの10年以上、政治は混乱しますが、その間、鉄道や通信、郵便といったインフラの分野での近代化は非常に急速に進みます。版籍奉還（1869年）や廃藩置県（1871年）という、言わばサムライの自己変革も認めねばなりません。これはやはり大久保の功績でしょう。「薩長史観」を批判する側でも、評価せねばならないでしょう。もっとも徴兵制という余計なものまで導入され、当時の国民はものすごく苦勞したと思いますけれど。

軍部暴走の下地

——それでも薩長の権力者が天皇を神格化した上で、自分たちが権力を振るうために利用したことが後々までたたり、1945年8月15日の破局をもたらしと言えるのではないのでしょうか。

薩長のリーダーたちは、新国家の青写真を誰も持つてはいなかったと思います。同時に江戸の町民や田舎の農民も、天皇だの「尊王」だのと言われても何もわからず、



50年前の「明治百年記念式典」で、「日本国万歳」を三唱する佐藤栄作首相(当時)。壇上中央は、昭和天皇と皇后。(1968年10月23日。日本武道館で。提供/共同)

権威も感じていませんでした。しかし、新国家を作る上で国民を統合する機軸がないのを知っていた伊藤は、「万世一系の天皇」を利用し、大日本帝国憲法で天皇制国家を作った。ただ、昭和の破局について言うなら山縣が西南戦争の後になって、先に軍事国家を作っていた事実を忘れてはいけません。

——「統帥権の独立」の問題でしょうか。

そうですね。軍隊は天皇直属であって、これに政府は関与できないという、近代のシビリアンコントロールの原則を無視した、世界でも珍しい軍事国家ができてしまいました。山縣は1878年(明治11年)に参謀本部条例を制定させ、これによって天皇のみが統帥権を持つ「統帥権独立」が確立します。この条例は陸軍省から独立した参

薩長の暴力による権力奪取を 歴史的必然と見なしではならぬ

謀本部を創設する内容で、山縣は陸軍卿を辞任し、天皇に直接上奏できる初代参謀本部長に就任します。つまり山縣は、参謀本部長というポストを握れば自由に軍隊を動かせる国家を作った。これが昭和になって陸軍が暴走し、破局を招く大きな原因となりました。

司馬遼太郎の「物語」

——その意味で、明治と昭和のファシズムは直結しています。

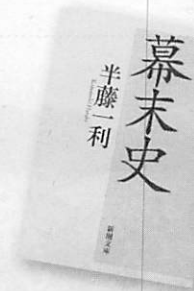
司馬遼太郎さんは晩年、「統帥権」という魔法の杖が振り回され、昭和の20年間は、日本を別の国に変えてしまった」という意味のことを書いていますが、そうではないでしょう。歴史は一つに繋がっていませんから、昭和になってから急におかしくなったはずではないです。すでに、原因があった。それを認めなければならない人たちもおられるようですが(笑)。

——司馬氏の「坂の上の雲」などは、まさに「薩長史観」による物語の産物のような気がしますけれど、「国民作家」としての大変な影響力が、社会の中で「明治維新」を賛美する風潮を広げたのでは。

司馬さんは、うまいですから。

幕末史

半藤一利



初めて「薩長史観」という用語を生み出した、半藤氏の「幕末史」(新潮社)。

物語というのは、途中で「これはおかしい」と書いたら前に行けなくなるのです。トントンと進む形にしないと、物語にならない。戊辰戦争から明治新政府ができるまで、司馬さんの作品は物語としては非常に良くできてはいると思いますけれど。よく「歴史に学べ」と言われますが、なかなか歴史に学ぶというのは困難なのです。よほどの知識がないと、まず無理です。その代わり、私は「歴史を学べ」と言っている。「明治150年」を祝うよりも、まず学んだ方がいいでしょう。少なくとも整然と新政府ができて、整然と日本が文明開化した、という流れではないことがわかったと思います。

聞き手・まとめ/成澤宗男(編集部)

はんどろくかずとし・1930年、東京生まれ。文藝春秋入社後、週刊文春、「文藝春秋」の編集長などを歴任。「フモンハンの夏(文藝春秋)」、「日本のいちばん長い日」(同)、「日露戦争史(平凡社)など著書多数。